

学校教育目標

子どもたちに意欲・熱中・満足を実現します

研究主題

ともにかかわり合いながら、自分づくりを進める子どもの育成

1 横浜市立立野小学校教育課程編成の方向性

平成30年度より、立野小学校では、学習指導要領改訂に伴い教育課程を編成するための授業研究を行っている。教育課程を編成するにあたって、まず、学習指導要領総則を分析することで教育課程編成の方向性を定めていった。

(1) 学習指導要領総則の分析

学校教育が組織的、継続的に実施されるためには、学校教育の目的や目標を設定し、その達成を図るための教育課程が編成されなければならない。(総則 p 14)

学校教育目標 「子どもたちに意欲・熱中・満足を実現します」

各学校の教育課程は、これらの学校の運営組織を生かし、各教職員がそれぞれの分担に応じて十分研究を重ねるとともに教育課程全体のバランスに配慮しながら、創意工夫を加えて編成することが大切である。また、校長は、学校全体の責任者として指導性を発揮し、家庭や地域社会との連携を図りつつ、学校として統一のある、しかも一貫性をもった教育課程の編成を行うように努める必要がある。(総則 p 18)

教育課程を編成するための方向性を明確にする必要がある。

授業研究をする必要がある。

児童や学校及び地域の実態を適切に把握し、教育の目的や目標の実現に必要な教育の内容等を教科等横断的な視点で組み立てていくこと、教育課程の実施状況を評価してその改善を図っていくこと、教育課程の実施に必要な人的又は物的な体制を確保するとともにその改善を図っていくことなどを通して、教育課程に基づき組織的かつ計画的に各学校の教育活動の質の向上を図っていくこと(以下「カリキュラム・マネジメント」という。)に努めるものとする。(総則 p 40)

子どもたちの現状を分析する必要がある。

作って終わりではなく、活用して評価し、これまでに作成したものを改善していく必要がある。→授業研究の必要性

「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進める際の指導上の配慮事項

ア 児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指した授業改善の取組は、既に小・中学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組み蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はないこと。

立野小学校のこれまでの研究成果を活用していく。

イ 授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること。

ウ 各教科等において通常行われている学習活動（言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など）の質を向上させることを主眼とするものであること。

エ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。

オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。

「見方・考え方」を働かせることができるように授業改善していく。

カ 基礎的・基本的な知識及び技能の習得に課題がある場合には、その確実な習得を図ることを重視すること。（総則 p 4）

今回の改訂は、「生きる力」の育成という教育の目標が各学校の特色を生かした教育課程の編成により具体化され、教育課程に基づく個々の教育活動が、児童一人一人に、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を發揮し多様な他者と協働しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育むことに効果的につながっていくようにすることを目指している。（総則 p 3 5）

今回の改訂も「生きる力」の育成を目指していることは変わらない。

「知識・技能」

教科の特質に応じた学習過程を通して、知識が個別の感じ方や考え方等に応じ、生きて働く概念として習得されることや、新たな学習過程を経験することを通して更新されていくことが重要となる。

(総則 p 3 7)

「高い質の知識・技能」が必要。「知っている」ことを「関連付ける」ことが大切。

「思考力・判断力・表現力」

- ・ 物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程
- ・ 精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程
- ・ 思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程 (総則 p 3 8)

このような学習過程を経る時には、「比較」「分類」「整理」「関係付け」「推論」といった思考をしながら判断し、表現する活動を行っている。そのような学習活動にしていかなければいけない。

「学びに向かう力・人間性等」

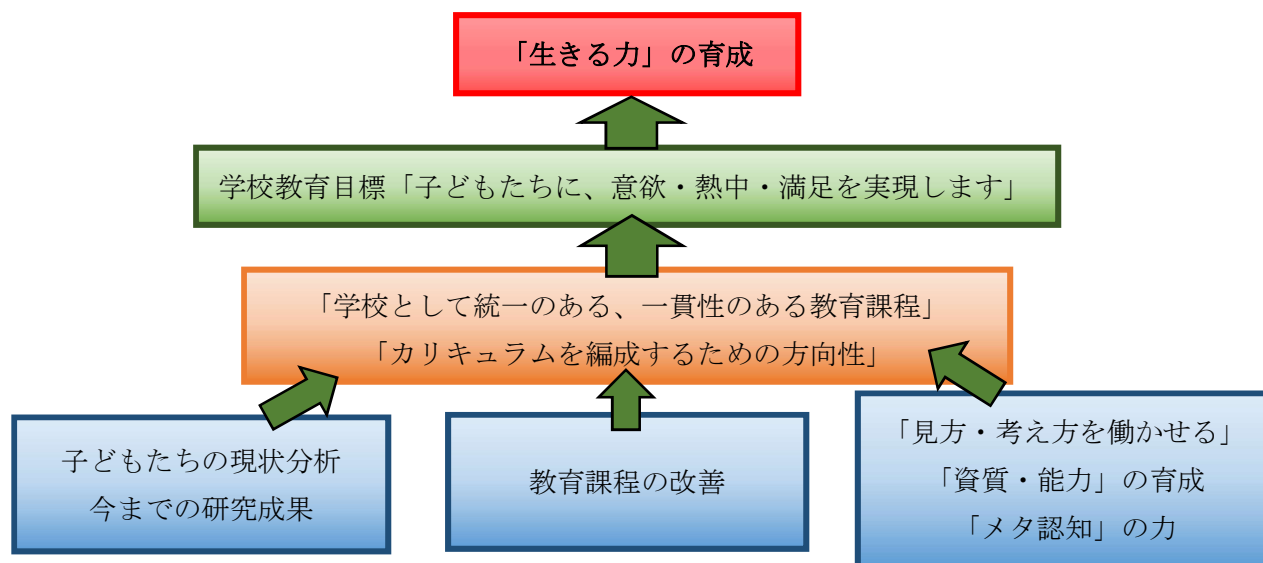
児童一人一人がよりよい社会や幸福な人生を切り拓いていくためには、主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力や、自己の感情や行動を統制する力、よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度等が必要となる。これらは、自分の思考や行動を客観的に把握し認識する、いわゆる「メタ認知」に関わる力を含むものである。こうした力は、社会や生活の中で児童が様々な困難に直面する可能性を低くしたり、直面した困難への対処方法を見いだしたりできるようにすることにつながる重要な力である。また、多様性を尊重する態度や互いのよさを生かして協働する力、持続可能な社会づくりに向けた態度、リーダーシップやチームワーク、感性、優しさや思いやりなどの人間性等に関するものも幅広く含まれる。(総則 p 3 9)

「メタ認知的活動」を取り入れる必要がある。→学習の方法や内容の「振り返り」

(2) 教育課程編成の方向性

教育課程を編成することで、学校教育目標「子どもたちに意欲・熱中・満足を実現します」を達成できるようにしていきたい。学習指導要領総則編によると、「学校として統一のある、一貫性のある教育課程」にするためには、「カリキュラムを編成するための方向性を明確にする必要」がある。そのためには「子どもたちの現状を分析する必要」がある。子どもたちの現状を分析し、課題を明確にしたうえで、どのような教育課程を編成していくのか考えるとき、「今までの研究成果を活用する」ことができる。しかし、今までと同じではなく、「見方・考え方を働かせる」ことができるような授業、「資質・能力」を育成するための教育課程にしなければならない。そうすることで学校教育目標を達成し、「生きる力」の育成を目指す。そこで、「メタ認知的活動」が重要になってくると考えた。見方・考え方を働かせたり、自分の学習状況をメタ認知したりすることを通して、「資質・能力を身に付けた姿」が見ら

れるような授業にしていく。「教育課程は編成して終わりではなく、活用して評価し、改善して必要がある」ので、「授業研究」が欠かせないと考えられる。



過去数年間の研究においては、「学習に意欲的に取り組む姿」、「自分の考えを積極的に発表する姿」、「社会事象や自然事象に主体的に働きかけ、問題意識をもって追求し、それをもとに考えたことを自分自身の言葉で語る姿」、「自分の伝えたいことを相手に分かってもらうために何とか伝えようとする姿」、「相手の伝えたいことを本気で分かろうとする姿」、「友達と交流することのよさを感じる姿」、「身に付けた力を同じ教科の他の単元や他教科に生かす姿」が見られ、成果が出ている。

一方で、「意欲が継続しない」「言われないとやらない」「進んで動くことが少ない」「低いレベルでの満足で終わることがある」という課題が残った。

そこで、「表面的ではなく、より深く、心から「意欲・熱中・満足」する子ども」を育てていく必要がある。これは、学習指導要領が目指している「生きる力」そのものである。「生きる力」を英訳すると、「zest for living」である。「zest」とは、「心から湧き上がってくる強い興味、熱意」という意味である。本校の学校教育目標を実現することは、「生きる力」を育成することにつながる。それは教育課程編成の目的と合致する。つまり、今までの研究の方向性は、新しい教育課程編成の方向性と一致している。

(3) 研究主題の設定

学習指導要領を分析し、立野小学校の子どもの実態と教師の願いを重ねると、「もっといろいろなかかわり合いが必要」「変化の激しい時代を生き抜くためには自ら進んで活動できるようになることが必要」ということが見えてきた。そこで、研究主題を「ともにかかわり合いながら、自分づくりを進める子どもの育成」と設定した。この研究主題を具現化することが「意欲・熱中・満足する子ども」の姿になり、それは、「生きる力」を育成することになる。

2 研究主題の分析

(1) 「ともにかかわり合いながら」について

「ともにかかわり合いながら」とは、「つながりを求め続ける姿」と捉えている。人、もの、こととの関わり、そして、つながっていくことで自分も相手もプラスになることを実感することで、つながりを求め続けて行動できるようになってほしい。そのために、「対話を通して考える姿」を目指す。対話をするのが目的ではなく、対話することで自分との考えの違いや共通点を見いだしたり、関連付けたりすることで、今のところ一番良いと考えられることを導き出してほしい。それは、「子ども同士が協働する姿」「教職員や地域の人と対話する姿」「先哲の考えを手掛かりにする姿」を目指していくことで、達成されるのではないかと考えている。その中で、「批判的思考」を身に付けながら、場面に応じて「相互理解」や「合意形成」をしていく。その前提として「問題意識」をもって学習に取り組み、個の考えを明確にしていく必要がある。

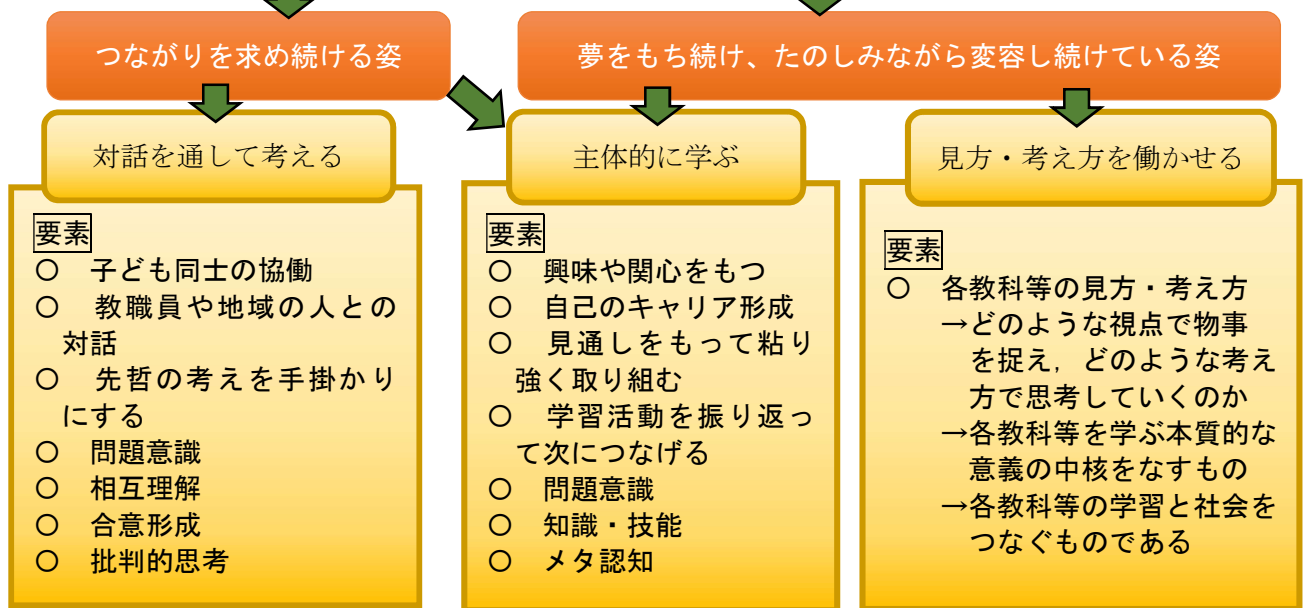
(2) 「自分づくりを進める」について

「自分づくりを進める」とは、「夢をもち続け、たのしみながら変容し続けている姿」と捉えている。「夢」とは、将来就きたい職業だけでなく、なりたい自分像、ありたい社会像、日々の目標も含んでいる。変化の激しい時代に対応するためには、資質・能力を身に付け、自分を変容させる必要がある。それをたのしめるようになれば、自分を変容し続け、変化に対応することを越えて、自分から社会に働きかけてより良い方向に進めていくことができると考えている。そのために、「主体的に学ぶ姿」「見方・考え方を働かせる姿」を目指していくことで達成されるのではないかと考えている。

「主体的に学ぶ姿」については、「興味や関心をもつ姿」「自己のキャリアを形成していく姿」「見通しをもって粘り強く取り組む姿」「学習活動を振り返って次につなげる姿」を目指していく。そのためには、「知識・技能の確実な習得」、「メタ認知能力」が必要である。その前提として「問題意識」をもって学習に取り組めるようにしていく。「なぜ学ぶのか。」「どのように学ぶのか。」について子どもたちが自覚しながら学習を進めることで、意欲が持続したり、高まったりすることで活動に「熱中」して、「満足」する姿につながっていくと考えられる。

「見方・考え方を働かせる姿」については、学習指導要領総則編に、「各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められる」と書かれている。「見方・考え方」を自在に操ることができるようになると、ある事象に出合ったときに、物事を多面的に捉えることができるようになる。そうすると、新しい発見ができる可能性が高まる。それは「熱中」する姿、より深い「満足」する姿につながる。そして自分づくりを進めることができ、人生を豊かにすることができると考えられる。

ともにかかわり合いながら、自分づくりを進める子どもの育成



3 研究副主題の設定

(1) 副主題設定の背景

立野小学校の子どもたちの実態として、「知っていることが多いが、実際に試そうとしない」「世の中を眺めているだけのことが多い」「感動が少ない」「良い行動がたくさんあるが、自覚していない」「能力があっても自信がもてなくて一歩踏み出せない」というものが挙げられる。そのような子どもたちに対して、「汎用的な「高い質の知識」をつけてほしい」「世の中を「見る」ための「観察力」をつけてほしい」「感動を味わってほしい」「情熱をもって活動してほしい」「自覚的に行動できるようにしてほしい」という願いがある。そのような姿を目指すためには、「生活科・理科」を中心に学習を進めていくことが有効なのではないかと考えた。

立野小学校で考える生活科を学ぶ意義は、「体験を通した学びが全ての教科の基盤になること」「不思議に思ったことに立ち止まることで問題解決のプロセスに気が付き始めること」「情緒が豊かになること」「人・もの・ことと自分との関わりを太くできること」である。理科を学ぶ意義は、「自然事象の見え方が変わり、生活を豊かにできること」「問題解決の力がつくこと」「自然への畏敬の念を育めること」「科学の有用性と限界を知ること」と考えている。

湯川秀樹は、「一般の人々にとって必要なのは、専門的な科学知識をもつことよりも、むしろ科学の多くの部門に共通した根本的な物の考え方を身に付けることにあるとも考えられる。」と述べている。中谷宇吉郎は、「顕微鏡で形を知ったり、本を読んで分類の名前を覚えたりすることよりも、自分の眼で一片の雪の結晶を見つめ、自然の持っている美しさと調和に目を開くことの方がずっと科学的である。非科学の代表は、自分のすぐ目の前にある自然の巧みを見ないで、むやみと名前や理論だけを言葉で覚えることである。」と述べている。偉大な科学者たちが述べているように、自然事象をよく見ることで「自然の美しさ」を感じる心や、「共通する考え方」を大切にして、汎用的な力を育てていきたい。そこで、研究副主題を「自然をじっくり観察し、浸る子どもを育成する生活科・理科」と設定した。

立野小学校が考える生活科を学ぶ意義

- 体験を通じた学びが全ての教科の基盤になること
- 不思議に思ったことに立ち止まることで問題解決のプロセスに気づき始めること
- 情緒が豊かになること
- 人・もの・ことと自分との関わりを太くできること

立野小学校が考える理科を学ぶ意義

- 自然事象の見え方が変わり、生活を豊かにできること
- 問題解決の力がつくこと
- 自然への畏敬の念を育めること
- 科学の有用性と限界を知ること

研究副主題

自然をじっくり観察し、浸る子どもを育成する生活科・理科

研究仮説

自然をじっくり観察するための力を身に付け、自然や活動に浸ることができ子どもを育てるために「対話を通して考える」「主体的に学ぶ」「見方・考え方を働かせて学ぶ」授業をしていけば、つながりを求め続け、夢をもち続け、たのしみながら変容し続ける子どもになり、より良い社会を切り拓いていける子どもになるだろう。

(2) 研究副主題の分析

(ア) 「自然をじっくり観察」について

「じっくり観察」の「じっくり」とは、「時間をかけて」「注意深く」という意味である。「自然」は学習する対象であり、生活科の場合は「人・もの・こと」に広げて考えていく。これまでの研究を通して、立野小学校では、「愛着をもって見る」「たのしんで見る」「目的をもって見る」「見方・考え方を働かせて見る」「細かいところを見落とさないで見る」「既習事項や自分の体験と関連付けて見る」「意図していなかったところも見る」「一見関係なさそうな物を結び付けて見る」という子どもの姿を「じっくり観察」していると捉えている。

理科では、「じっくり観察」しながら「問題解決」をしていく。生活科では、「じっくり観察」しながら対象と関わっていく。そうすることで、「自然」に高い関心をもって関わるができるようになる。そして、対象に浸ることができ、さらに詳しく観察することができる。そうすると意欲も高まり、「満足」することができると考えている。

菅井啓之先生（元京都光華女子大学教授）は、観察とは「直観」と「洞察」であり、「驚きの心」「不思議の心」「美しさの心」「気づきの心」をもって見る大切であると述べている。それは、「自然との対話」である。「観察」することで「浸り」、「浸る」ことで「観察」することができるようになる。「観察」は、「観て」「察する」のであり、ただ「見る」とは違う。「直観」と「洞察」が高まってきたときに「じっくり観察する姿」になるのではないかと考えている。

(イ)「浸る」について

「浸る」とは、「どっぷりつかる」「境地に入る」「〇〇三昧」という意味である。立野小学校では、「浸る子ども」とは、「自分の生き方にプラスになっていることを自覚する」「今ある物の新しい良さ、美しさに気付く」「自分とみんなにとってよいものだと気付く」姿と考えている。

遊びに浸り、学びに浸る。学習対象と学習活動、その両方に浸る姿を目指す。自然事象や人・もの・ことのことごとくが大好きになり、対象に浸る姿。友達と話し合ったり、遊んだり、学びに浸る姿。それらが意欲の持続、高まりにつながり、「主体的に学ぶ姿」になっていくと考えている。

じっくり観察する姿

- 愛着をもって見る
- たのしんで見る
- 目的をもって見る
- 見方・考え方を働かせて見る
- 細かいところを見落とさないで見る
- 既習事項や自分の体験と関連付けて見る
- 意図していなかったところも見る
- 一見関係なさそうな物を結び付けて見る

浸る姿

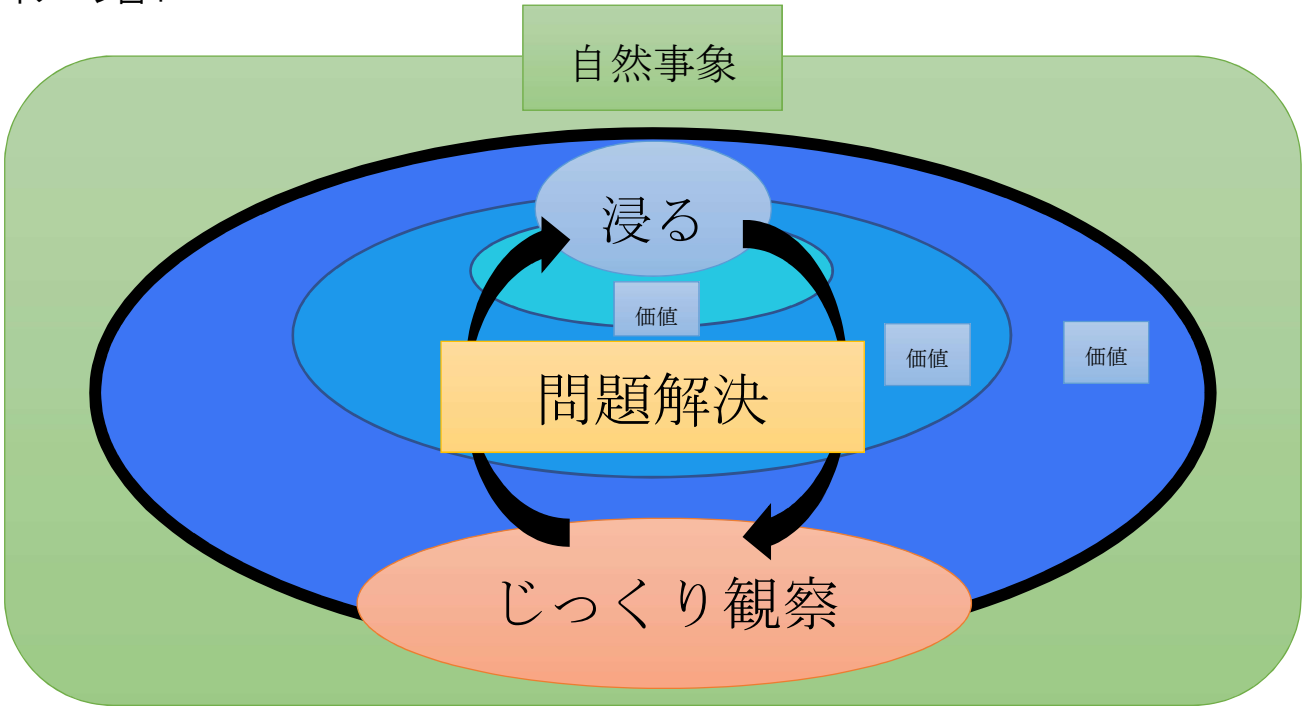
- 自分の生き方にプラスになっていることを自覚する
- 今ある物の新しい良さ、美しさに気付く
- 自分とみんなにとってよいものだと気付く

(ウ)「自然をじっくり観察し、浸る子ども」について

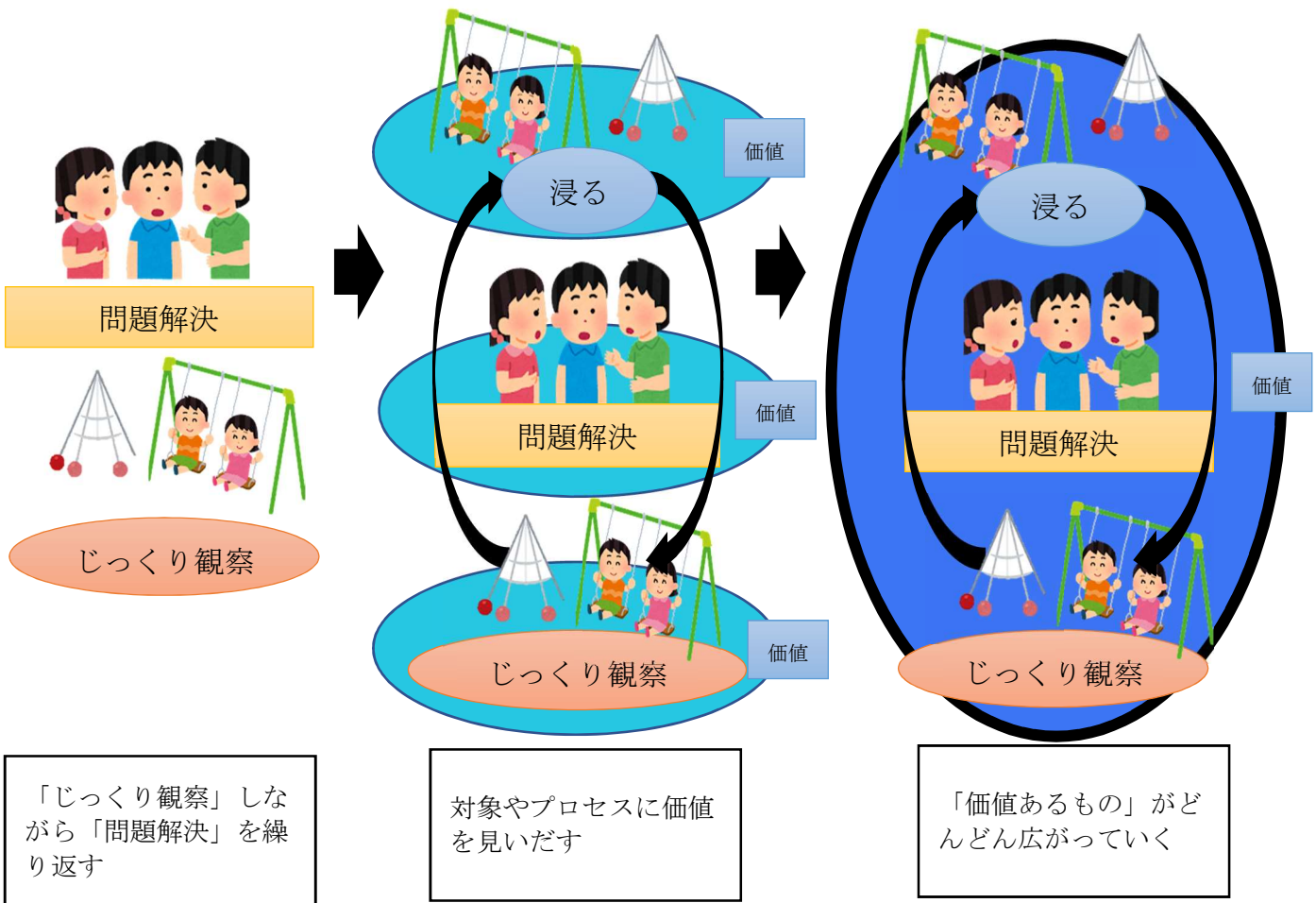
自然を「じっくり観察」しながら問題解決することで、「自分にとっての価値」を見つけ、自然に「浸る」ことができる。自然に「浸る」ことができればそこにまた価値を見つけることができる。そうすると、また「じっくり観察」することにつながる。その繰り返しにより、「価値」が広がり、その「プロセス（学び方など）」にも価値を見いだすことができるようになる。

そして、「浸る」ことで他の自然事象にも興味をもち、そこで出会ったものを「じっくり観察」することで、また「浸る」ことができるようになる。それがどんどん広がっていくことで「価値あるもの（こと）」が広がり、「生きがい」が広がっていく。それは「自分づくり」につながっていくと考えている。

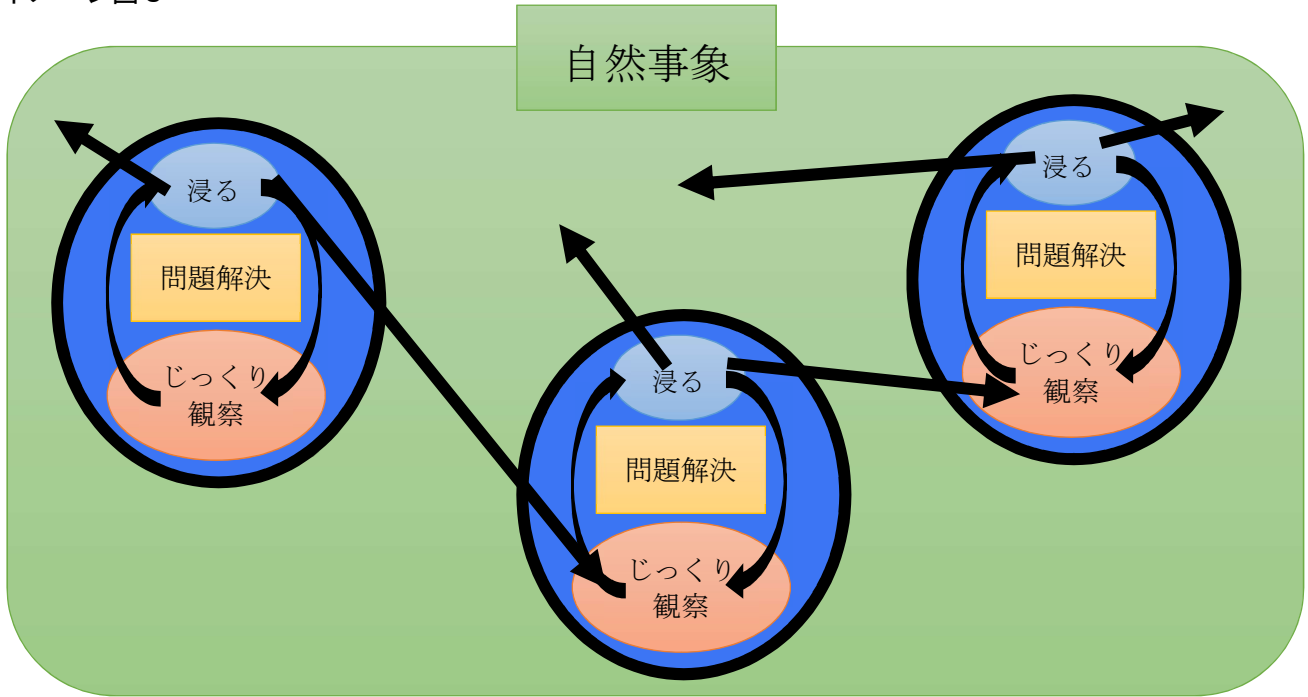
イメージ図1



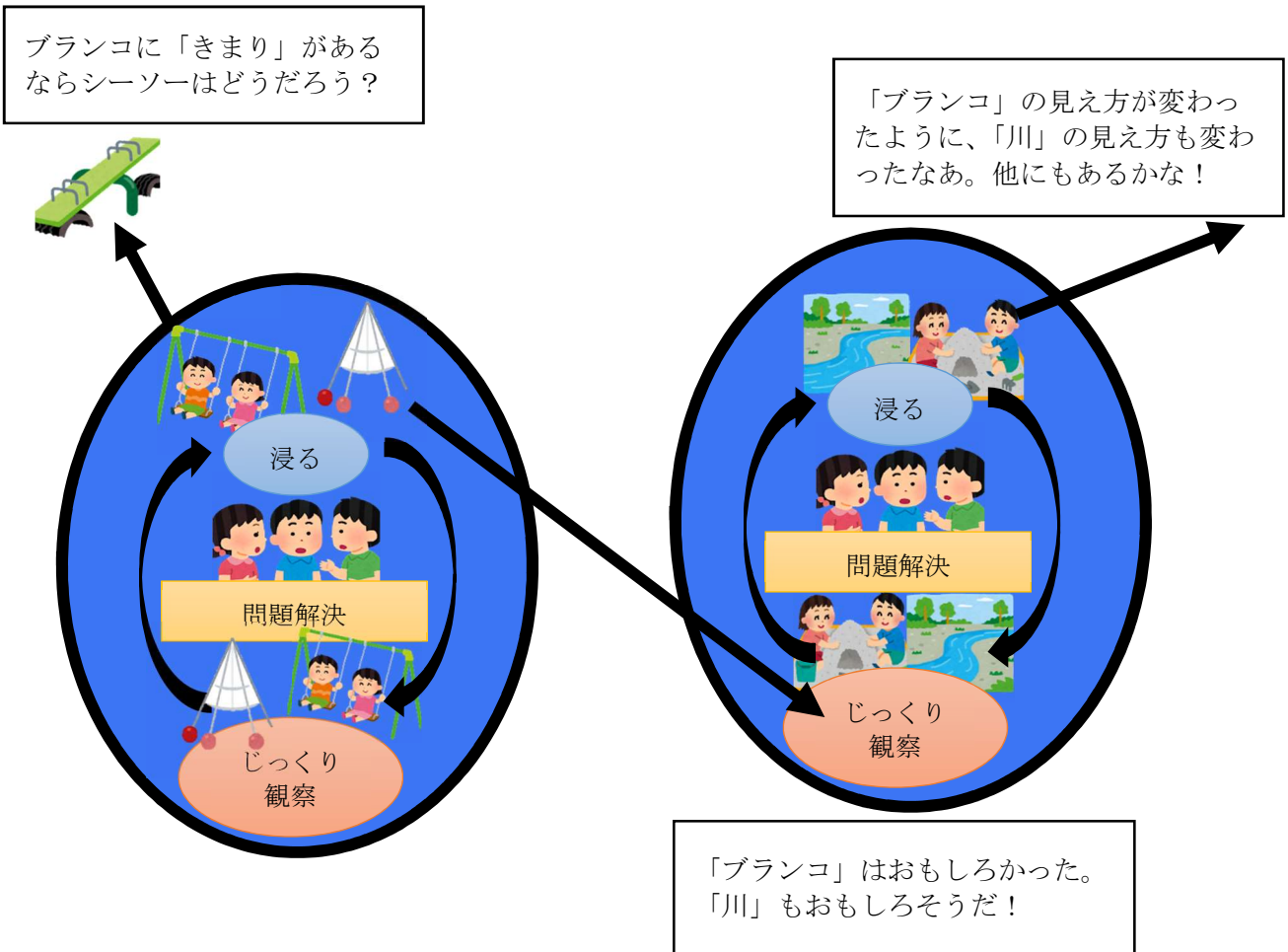
イメージ図2



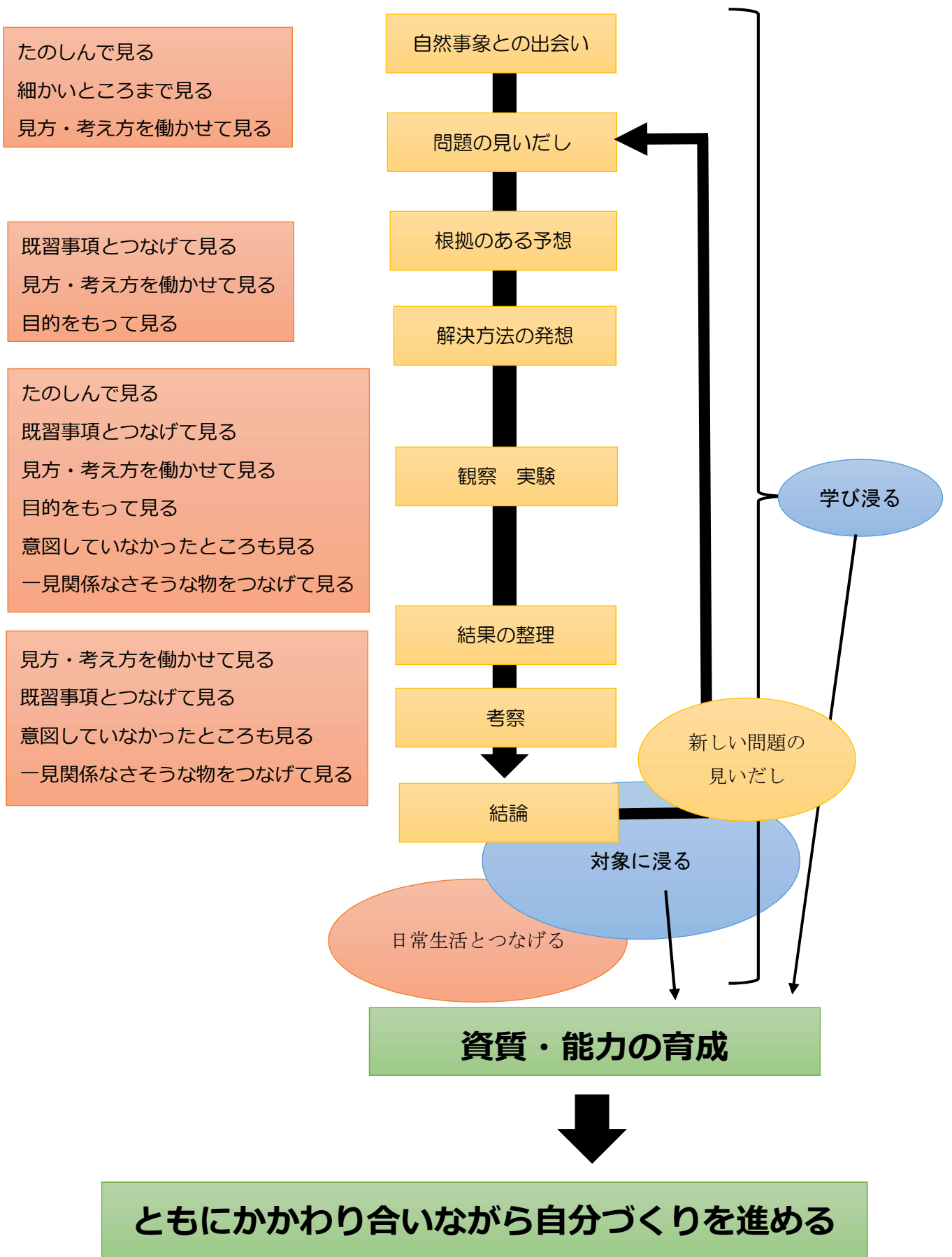
イメージ図3



イメージ図4



イメージ図5 (問題解決のプロセス研究テーマのつながり)



(3) 研究主題を実現するための手立て

研究主題を実現するために、「主体的で対話的で深い学び」の視点での授業改善を進めている。そのための具体的な手立てを6つ考えて実践している。これらの手立てのいくつかを組み合わせることで、浸る姿を目指し、資質・能力の育成をしていく。

(ア) 単元構成

生活科でも理科でも、「繰り返しの関わり」を大切にする単元構成にしていく。動植物をすぐにお世話できる場所に置いたり、何度も出かけていく時間を確保したりすることが考えられる。また、意欲を持続させながら、さらに高めていくために、図書資料を活用したり、観察日記をつけたりする。ただ繰り返すだけでなく、着目するところを明確にしたり、子どもの表現を価値付けたりすることで、意欲を持続させながら継続できるようにする。単元の中には今までの学習を振り返る場面を設定して、「浸る姿」につながるようにしていく。

○ 単元構成の例

- ・問題が解決したら次の問題を見いだすことができるような問題が連続する構成
- ・単元の始めに学習内容の全て、もしくはいくつかの問題が見いだされ、一つずつ解決していく構成
- ・単元のスタートに出会った事象を最後にもう一度見直す構成
- ・単元の後半はグループごとに問題解決を進めていく構成
- ・単元の後半に身に付けた知識を活用する場面がある構成
- ・単元の途中で再導入をして問題を見いだす構成
- ・繰り返しのかわりによって問題を見だし、個や集団で解決していく構成

(イ) 振り返り

単元の途中や最後に振り返る時間を設定する。それが「浸る姿」につながる。そのときに、単元の最初に出会った自然事象にもう一度触れたり、使った教材を目の前に置いたり、実際の場所に行ったりすることで、状況に入り込み、振り返りの質を高められるようにする。

○ 振り返りで書いたり話したりすること

- ・学習内容
- ・学習方法
- ・感想

○ 振り返るタイミング

- ・1時間の途中
- ・1時間の終わり
- ・1問題解決の終わり
- ・考察などを書いた後→リライトする
- ・1単元終了後
- ・複数単元終了後
- ・1年間の終わり

○ 振り返りの仕方

- ・ 視点を示して書く
- ・ 自由に書く
- ・ グループで話し合う
- ・ 全体で話し合う
- ・ 書いたものをもとに話し合う
- ・ 書いたものを見合ってアドバイスし合う
- ・ もう一度調べ直す
- ・ ロイロノートで写真や動画を残して、振り返る場面で見返せるようにする
- ・ 学習履歴を掲示物として残し、常に振り返ることができるようにする

(ウ) 具体的な価値付け

子どもの行動、文章、発言などを具体的に価値付けていく。「じっくり観察する姿」「浸る姿」が見られたとき、そこにつながる姿が見られたときに、何がどのように良く、何につながるのか、具体的に価値付けていく。これは、振り返りの視点となり、指導と評価の一体化とつながる。

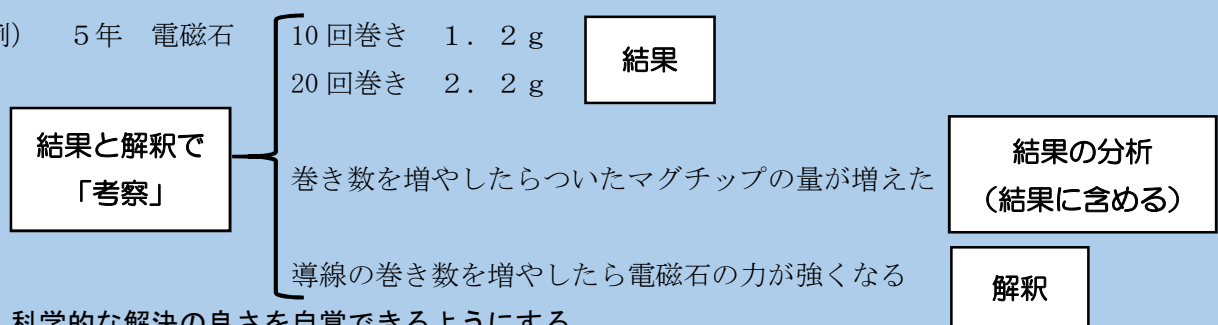
○ 価値付けの仕方

- ・ 何がどのように良く、何につながるのか具体的に声を掛ける
- ・ 何がどのように良く、何につながるのか具体的に記述する
- ・ 何がどのように良く、何につながるのか友達と記述し合う
- ・ 何がどのように良く、何につながるのか友達と話し合う

(エ) 実物に触れる、結果を大切にする

○ 「結果は数値、様子→目に見える物」ということを明確にする

(例) 5年 電磁石



○ 科学的な解決の良さを自覚できるようにする

- ・ 実証性、再現性、客観性について学年に応じて指導して、科学的な解決のよさを共通理解する。
- ・ 「実験は複数回、もしくは複数種類やった方がより正確なことが言える」という状況になるような単元構成にする→その場面を振り返り、よさを共有する

○ 結果のまとめ方

- ・ 文章 表 グラフ 絵 写真 動画 それらの組み合わせ

○ 結果の共有の仕方

- ・ 黒板 ロイロ共有ノート 紙 テレビモニター

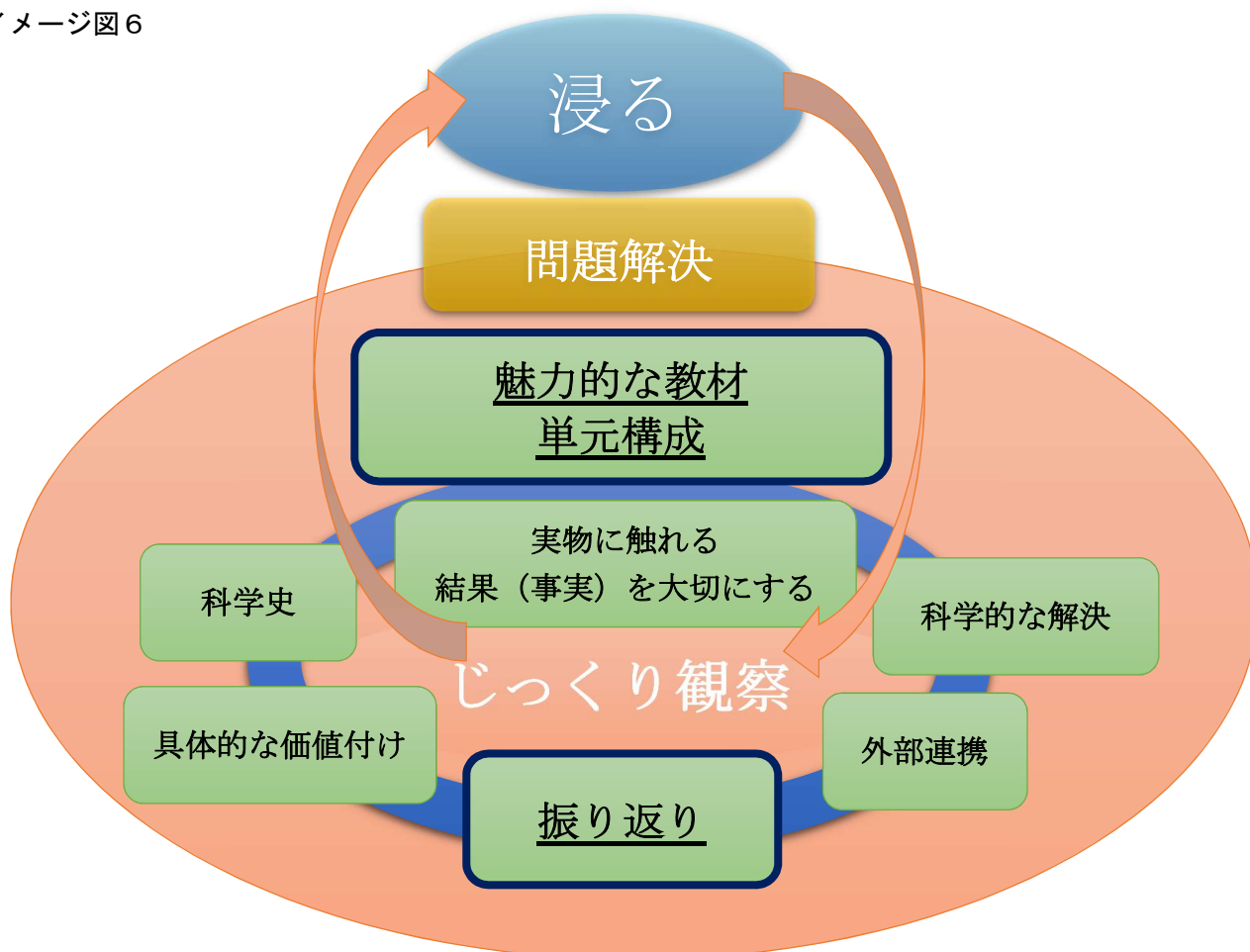
(才) 偉人の業績や科学史の活用

単元の途中や最後に、その学習に関わる科学者とその業績を紹介することで学習をさらに深められるようにする。例えば、5年生「天気の変化」では、「リチャードソンの夢」について紹介することで天気予報は人類の夢であり今もまだ改善が続けられていることを知り、「自分たちがさらによくしていこう」という思いをもてるようにしていく。6年生「物の燃え方」では、「空気の発見」や「ろうそくの科学」について抜粋して紹介することで、多くの科学者の発見が積み重なることで今があり、これからも続いていき、その一端を自分たちが担うという意欲をもてるようにしていく。他にも、国語科の伝記の学習で科学者を扱ったり、道徳科の自然愛護、真理の探究と関連付けたりしていく。

(力) 地域人材の活用 外部連携

生活科では、大和町商店街を中心とした地域の方とのつながりを大切にいく。理科では、4年生、6年生の天体の学習を JAXA と連携して行ったり、5年生の天気の学習では近くにある横浜地方気象台から気象予報士をお招きして出前授業をしてもらったりする。単元の中で子どもが必要感をもったときに人材を活用することで、専門的な知識を効果的に取り入れ、新しい視点で考えを深められるようにする。

イメージ図6



(4) これまでの実践の成果と課題

(ア) **じっくり観察する姿**

- 「さかせたいな、わたしの花」の学習では、花の咲いている様子や、大きくなっていく様子を身体表現を交えながら表現しているとき、「小指の長さから、中指の長さになった」と言っていて、細かいところ見落とさないでみる姿、愛着をもって見る姿が見られた。
- 虫の単元でエサをあげているときに、エサの食べ方を何度も繰り返し写真や動画で撮影して、目的をもって見る姿が見られた。
- 自分が飼っている生き物を毎朝の観察タイム以外でも、休み時間など毎日観察し、愛着をもって見る姿が見られた。
- 「光のせいしつ」の単元で、体育の時間に校庭へ出た時、体育倉庫の影になっているところと日向で、凍った地面の溶け方の違いがくっきりついているところを見つけて、意図していなかったところも見る姿が見られた。(浸ったからこそじっくり観察できた姿)
- 「音の性質」単元終了後、「先生、声を出すとのども震えているよ!」と話し、既習事項と自分の体験を関連付けて見る姿が見られた。(浸ったからこそじっくり観察できた姿)
- 「物の温まり方」の単元で、示温インクを使って水を温め、色が変わった後に火を止めて考察を書いた。その途中、下から色が戻っていることを見つけ、細かいところを見落とさないで見る姿、意図していなかったところも見る姿が見られた。
- 「振り子の運動」の単元のまとめとして、自分がやってみたいことに取り組んでいるとき、「今まで問題解決してきた、重さ、長さ、振れ幅を変えて自分の目でもう一度見たい」といいながらふりこを見ていて、既習事項と関連付けて見る姿が見られた。
- 物の燃え方の単元で、最後に火が消えていく様子を見たとき、「今、二酸化炭素になっているのかなと思ってみてた」と言っていて、既習事項と関連付けて見る姿が見られた。

(イ) **浸る姿**

- 「にこにこ大きくせん」では、おうちの人の見本を見てやり方を知ったり、にこにこ会議で動画を見ながらおうちの人や本人の表情の変化に気付いて子ども同士で価値づけし合ったりしていた。お風呂掃除では、3種類のブラシを使い分けて掃除している友達を見て、友達の新しい一面に気付く姿が見られた。
- にこにこ大きくせんの単元の最後の振り返りでは、家族が笑顔になると、自分も笑顔になるとつぶやく姿や、お手伝いをしておうちの人がにこにこになるのは、自分ができるようになったことや成長したことを喜んでいるからだと自分の成長を自覚していて、自分の生き方にプラスになっていることを自覚する姿が見られた。
- おもちゃの単元終了後、家庭で何個も新しいおもちゃを作ってきた。試行錯誤の良さに気付き、自分の生き方にプラスになっていることを自覚している姿が見られた(遊び浸り、学び浸る)
- 生き物の単元で、振り返りをしたとき「ダンゴムシに出会えて良かった。この子に会えたからぼくは問題解決を通して成長できた。」と記述し、自分の生き方にプラスになっていることを自覚する姿が見られた。

- 「チョウを育てよう」の単元で、家庭学習としてモンシロチョウを何羽も羽化させ、羽化する様子を動画で撮影し、ロイロノートでクラスの友達に共有し、自分とみんなにとってよいものだと気付く姿が見られた。
- 「音の性質」の単元で、リコーダーはどこから音が出ているか調べたとき、空気が震えていることが分かり、改めてリコーダーを吹くと「楽器を作った人って本当にすごい！音の出し方を考えて楽器を作っているんだね。」と発言し、今ある物の新しい良さ、美しさに気付く姿が見られた。
- 「人の体のつくりと運動」の単元で様々な動物の骨格、筋肉を調べたとき、「どの動物もすごいんだな」とつぶやいている子どもがいて、今ある物の新しい良さ、美しさに気付く姿が見られた。
- 国語の学習を活用して4年生に委員会紹介のプレゼンテーションをしたときに、「みんなが頑張っているから学校が成り立っている」と自分の生き方にプラスになっていることを自覚する姿が見られた。
- 月の単元終了後、ずいぶん経ってからの卒業文集の題名が「35日間の観察日記」で内容は、「毎日欠かさず行うようになった。見えない日には原因も考えられた。いつのまにか月を美しいと感じるようになった。」と記述し、今ある物の新しいよさ、美しさを見つける姿が見られた。
- 人の体のつくりと働きの単元終了後、帰り道で「あの赤ちゃんの中にも心臓とか肺があってちゃんと動いていて、生きていて思うとすごいよね」と話しながら帰った子たちがいて、今ある物の新しい良さ、美しさに気付く姿が見られた。
- 人の体のつくりと働きの単元終了後、「そんな普通に簡単にやっていることでも、実験をして、真実を探求する！なんてこと、この人生の中で多分一回もないと思う。そんな機会をくれる小学校が楽しい」と記述し、自分の生き方にプラスになっていることを自覚する姿が見られた。
- 人の体のつくりと働きの単元終了後、「新しい景色をまた皆で見よう！」と記述して、自分とみんなにとって良いものだと気付く姿が見られた。

5 成果と課題と改善点

成果

- 虫や野菜など、対象と繰り返し関わることで「苦手」と感じていることも「好き」と感じる子どもが増えた。
- 自然を観察することで、「自分は大切に育ててもらってきたことがよく分かった」「自分は意外にできるようになっている」といったように、自分自身への気付きが深まり、自己肯定感が高まった。
- 「友達といっしょにやると楽しい」「〇〇さんのおかげでできるようになった」「みんなで話し合っただけで気付くことがあるのが学校のいいところ」といったように、他者への意識が高まってきた。
- 科学的な解決のよさを自覚しながら学習を進めることができるようになってきた。
- 振り返りの場面で、「問題、予想、実験方法、実験、整理、考察、結論という流れも遊びみたいに感じる」といった発言があり、「遊び感覚」で楽しく学習することで意欲が持続できるようになってきた。
- 学習内容や学習方法を振り返って次につなげて改善することができるようになってきた。

課題と改善案

- 一部の子どもたちに成果は出ているが、もっと多くの子どもたちに広げていく必要がある。
→ 評価基準を設定して指導改善に生かし、個の見取り、個に応じた指導を徹底していく

- 「めあては達成できた。なぜならめあてが達成できたから。」というような記述になっている子どもが複数いる。
→ 「振り返り方」を確認するとともに、「振り返るよさ」を実感できるように個別に具体的に価値付けしたり、子ども同士で話し合ったりしていく。

- 理科では、自然事象と生活がつながっていると自覚している子どももいるが、もっと多くの子どもたちが自覚できるようにしていく必要がある。
→ 自然事象と生活のつながりを複数の単元構成の中に入れる。また、タブレット端末を活用して家庭や地域で関連する物を見つけて共有する時間を確保する。

- 「〇〇が楽しかったから、自主学習でやってみます」と書いていても、やってこないことが多い。
→ 子どもの心に火を灯すように、子どもたちが本気になって追究できるような学習を継続していく。「子どもの問題」になるような単元構成、自主学習でやってきたことへの価値付け、自主的に進めることでより理解が深まり楽しくなることを自覚するための振り返りの場の設定をしていく。

- じっくり観察する姿については、「一見関係なさそうなものを結び付けて見る」の事例が少ない。
→ 理科や他教科の見方・考え方を働かせた教材研究をすることで理解を深め、子どもたちの発言や記述に表出しているものを今よりもっと読み取れるようにしていく。

- 浸る姿については、「自分とみんなにとってよいものだ気付く姿」の事例が少ない。
→ 振り返りを共有する時間を設定して、自分にとってプラスになっていることが、友達にとってはどうなのかお互いに話し合ったり、問い返したりしていく。そうすることで、自分にとってプラスになっていることがみんなにとってもプラスになっていることがあると分かるようにしていく。